

「つながり」を大切にする学校 —豊かな自然環境に囲まれた教育実践から—

望月 裕司

「多くの人々は、他者の「幸せ」に対してはとても敏感であり、誰もがその「幸せ」を共有しようとする。しかしながらその一方で、多くの人間は他者の「痛み」に対しては無関心である¹⁾」

「持続可能な開発のための教育 (ESD)」を考えるに際して、上記の言葉のように他者との共有を通し、自分と他者との「つながり」について認識することは重要なことであろう。

本稿では、カルナータカ州バンガロール (インド) から北東約 140km に位置するアンドラ・プラデッシュ州郊外における、「対話 (discussion)²⁾」と「ふれあい (interaction)」による子どもたちと教師の「つながり」、そして豊かな自然環境からの恵みを受けることで自然との「つながり」をも大切にする教育機関、「リシヴァリー・エデュケーションセンター (Rishi Valley Education Centre)」の教育実践について取り上げていきたい。

リシヴァリー・エデュケーションセンターの自然環境

リシヴァリー・エデュケーションセンターは、インドの哲学者であるジッドユ・クリシュナムルティ³⁾ (Jiddu Krishnamurti 1895-1986) の教育理念を具現化するために、1926 年インド南部のアンドラ・プラデッシュ州に創設された。クリシュナムルティによって創設された教育機関は、インド国内のみならずインド国外にも存在する⁴⁾が、その中でも最初に創設されたのがこのリシヴァリー・エデュケーションセンターである。250 エーカーという広大なキャンパス内には、4~12 年生に該当する約 350 人の子どもたち (8~17 歳) が学ぶ全寮制の学校 (共学) 「リシヴァリー・スクール (Rishi Valley School)」、周辺の農村地域に住む人々に対して無償の教育機会を提供している「リシヴァリー農村教育センター (Rishi Valley Rural Education Centre)」、病院としての役割を担っており、特に結核の治療や眼科としての設備が整っている「農村ヘルスセンター (Rural Health Centre)」、クリシュナムルティに関連する著書を所蔵し訪問者などが図書室として利用することができる「クリシュナムルティ・スタディ・センター (The Krishnamurti Study Centre)」がある。

¹⁾ リシヴァリー・スクールでヨガ yoga とヒンディー語の教師を務めているラモラ氏 (Mr. Vijendra Ramola) へのインタビューから(2006 年 12 月 6 日)。

²⁾ リシヴァリー・スクールで使われている、「discussion」は「dialogue」に近い意味をもつため、筆者は本稿において「対話」と訳した。

³⁾ クリシュナムルティに関する詳細は、神尾 (2005)、pp.107-149 を参考。

⁴⁾ インド国内には、他にもバンガロールのヴァリー・スクール (The Valley School)、チェンナイのスクール (The School) やバナラシのラジカート・ベサント・スクール (Rajghat Besant School) がある。インド国外には、アメリカのオーク・グループ・スクール (Oak Grove School : <http://www.oakgroveschool.com/>) やイギリスのブロックウッド・パーク・スクール (Brockwood Park School : <http://www.brockwood.org.uk>) がある。

現在、大自然に囲まれているリシヴァリー・エデュケーションセンターのキャンパスではあるが、かつてその周辺地域は環境破壊によって荒涼たる風景が広がっていた。しかし、植林などの環境保全活動を続けた結果、本来あるべき自然環境へと再生したという。現在、キャンパス内では有機農園や薬草園、果樹園などがあり、1991年7月には野鳥保護国際委員会 (International Council for Bird Preserve) から「野鳥保護区 (Bird Preserve)」に認定された。その豊かな自然環境から、リシヴァリー・スクールにおける環境教育の授業では、約200種類ともいわれる多種多様な野鳥が生息するキャンパス内を教師と子どもたちが共に散歩し、バード・ウォッチングやハイキングなどを通して自然に直接触れる学びが行われている。

9～12年生に対して環境教育を担当しているサンサラム氏 (Mr.V.Santharam) は、リシヴァリー・スクールの学校環境について、「リシヴァリー・スクールの生徒たちにとって、勉強をすることや試験を受けるということに対するプレッシャーは他の学校の生徒と同じくらいあると思います。しかし、リシヴァリー・スクールは都市部に位置するような学校とは異なり、大自然に囲まれた「静寂 (Silence)」があります。都市部出身者の多いリシヴァリー・スクールの子どもたちにとっては、そういった自然環境に身をおくという経験が非常に大きいのです⁵」と言う。卒業生の中には、この「静寂」ある学校環境を惜しんでリシヴァリー・スクールを訪ねてくるものも少なくないという。

この豊かな自然環境の下、リシヴァリー・スクールでは「対話」と「ふれあい」による人と人との「つながり」を重視することに教育的意義を見出している。

共同生活で育まれる豊かな人間関係

リシヴァリー・スクールで学ぶ子どもたちは、インド全土から集まってきており、選抜の基準に、学力のみならず個々の「人格 (character)」や「才能 (talent)」といった要素も含まれており、応募者のうち入学を許可されるのは12%のみであるという⁶。リシヴァリー・スクールは全寮制の学校であり、キャンパス内には1つの寮あたり約12～22人の子どもたちが生活できる学生寮が合計21ある。また、リシヴァリー・スクールで働く教職員もキャンパス内に住んでおり、一部の教職員は「ハウス・ペアレンツ」として、それぞれの寮に子どもたちと一緒に生活している。リシヴァリー・スクールは、子どもたちが授業を通して特定の科目を学ぶだけでなく、キャンパス内での共同生活を通じて「協調性」や「独立心」といったホリスティックな学びに重きをおいている共同体なのである。

リシヴァリー・スクールで学ぶ子どもたちは、朝食前に図書館や各々の部屋にて自習を行い、グラウンドへ出てバレーボールやテニス、バスケットボール、サッカーなどのスポーツのほか、ヨガなどを行う。その後、平日であれば4～8年生 (Junior Student) は午前7時から、9～12年生 (Senior Student) は午前8時からキャンパス内の食堂で朝食をとる。食事の際、子ども

⁵ リシヴァリー・スクールで環境教育の教師を務めているサンサラム氏 (Mr.V.Santharam) へのインタビューから(12月4日)。

⁶ *Information Brochure*. p.3.

たちは自由に座り、教職員もその輪に交じり食事を共にする。リシヴァリー・スクールの食事に使われている食材は、キャンパス内で有機栽培された新鮮かつ安心な野菜や果物である。

朝食の後には、子どもたちと教職員全員が講堂に集まる「モーニング・アセンブリー」と呼ばれる朝の集会がある。講堂へ移動したら、当日に歌う曲が4曲ほど選曲されて講堂内の黒板に書かれているので、まずはその歌詞が書かれている本を各自一冊ずつ受け取る。講堂内での座席は決まっておらず、自由に座って最初に歌う曲の歌詞が書かれているページを開いたまま始まりの合図を待つ。そして、始まりの合図とともに全員が一斉に静まり、数分間の静寂の後、合唱が始まる。合唱中は参加者全員が真剣に歌い、歌声が講堂内に響き渡る。全曲合唱が終われば、子どもたちはそれぞれの授業を受けるために教室へと移動する。

リシヴァリー・スクールでは、1クラスあたり教師1人に対して、生徒の人数が20人ほどの少人数クラスで編成されており、教育方針としては以下の4つのことを基本にしている⁷。

- ① 子どもたちが自然世界 (natural world) や感覚世界 (the world of feeling) を探求すること。
- ② 自然愛 (love for nature) や地球上に存在する「生きとし生けるもの」への尊敬 (respect for all forms of life) の念を培うこと。
- ③ 子どもたちの心の中に恐怖心をもたせない、「愛情のある環境 (atmosphere of affection)」、「秩序ある環境」、そして「自由な環境」を創ること。
- ④ 自由な探求を培うために、何か一つの「信念 (belief)」や「宗教 (religious)」、「政治、社会的 (political or social)」概念に囚われないこと。

このよう多様な教育方法をとっており、ある一定の教育方法というものに従っているわけではない。教師が子どもたちに対して一方的に教えるという関わりではなく、両者の間での「対話」と「ふれあい」に重きをおくことを重要視している。リシヴァリー・スクールで9年生の女の子が「先生や友達と生活を共にするにあたり、思っていることを胸の中に閉まっているだけでは一緒に生活していくことはできません。お互いの信頼関係を築き上げるためにも「対話」と「ふれあい」は大切だと思っています⁸」と言うように、リシヴァリー・スクールの子どもたちは日常生活を通して、他者との関係性についても学ぶ。

また、リシヴァリー・スクールでディレクターを務めるラディカ氏 (Dr. Radhika Herzberger) が子どもたちと教職員の関係について、「同じ人間として、子どもたちと教職員はあるレベルにおいて平等の関係にあります。どのようなレベルにおいてか。それは両者とも多くの怒りを抱えることもあるでしょう。将来についても不安をもっているでしょう。野心家でもあるでしょう。そのような感情のレベルにおいては、子どもたちも教職員も一人の人間として皆、同じです。それゆえ、子どもたちと教職員の関係においては、「権力関係 (power relationship)」にあるのではなく、「平等な関係」にあるという認識が必要なのです⁹」と述べているように、リシ

⁷ 詳しくは *Information Brochure*. p.2 を参照。

⁸ リシヴァリー・スクール9年生に属する生徒へのインタビュー調査から(2006年12月4日)。

⁹ リシヴァリー・エデュケーションセンターでディレクターを務めるラディカ氏 (Dr. Radhika Herzberger) へ

ヴァリー・スクールでは子どもたちと教職員、及び子どもたち同士における平等な人間関係の構築にも重きを置いている。

現在、豊かな自然環境が広がるリシヴァリー・スクールのキャンパス内では、教師と子どもたちが共に散歩することで、教育方針の①、②に挙げられているような「自然美とのふれあい」、そしてその自然環境の下、子どもたちと教師間での「対話」や「ふれあい」を通じて、教育方針の③に挙げられているような教師と子どもたちにおける豊かな人間関係を構築するための教育環境が創りだされているのである。

「分かち合い」による学び

リシヴァリー・エデュケーションセンターの活動には、クリシュナムルティの教えを普及することや継承することのみならず、農村地域に住む人々に対する無償の教育機会の提供、及び健康管理といった周辺地域に住む人々への社会貢献も行っている。その具体的実践が周辺農村地域に住む子どもたちを対象にした、無償の教育機会を提供している「農村学校 (Rural School)」である。

現在、そのような学校は18校存在し、各校とも1人ずつ教師が配置され、約30人の子どもたちが学んでいる。一見、子どもたちの人数に比して教師の数に問題があると思われるかもしれない。しかし、子どもたちの各学習レベルに応じて、以下の5段階に分けることで子どもたちの一日の学びを充実させる工夫がされている。

- ①「教師からのサポートが必要な子ども (Completely Teacher Supported)」
- ②「部分的に教師からのサポートが必要な子ども (Partially Teacher Supported)」
- ③「他の生徒からサポートが必要な子ども (Completely Peer-Supported)」
- ④「部分的に他の生徒からサポートが必要な子ども (Partially Peer-Supported)」
- ⑤「教師のサポートなしでも学習できる子ども (Self-Learning)」

このように、個々の学習能力別に分けることで、子どもたちの間に壁を作ってしまうと考えられるかもしれない。しかし、上述の③、④段階にも記されているように、農村学校では子どもたち同士で教えあう、「分かち合い」による学びが育まれている。

今回の滞在では、そのうちの1校である「サンドラ・ヴァナム (SUNDRA VANAM)¹⁰」校に訪問した。授業を行う教室の内部は、教師と子どもたち自身の手によって作成された作品が飾られており、子どもたちが学ぶことを楽しむための空間を提供している。また、農村学校で子どもたちが使用する教材は、紙の消費量を抑えるため環境への配慮がなされており、何度でも繰り返して使用できるよう工夫がされている。子どもたちは、教材を他者と共有することを通して、環境問題についても学ぶのである。

教室で授業を受ける際、子どもたちの座席は、ある1つの段階に属する子どもたち同士で固

のインタビューから(2006年12月4日)。

¹⁰ 「サンドラ・ヴァナム (SUNDRA VANAM)」とはテルグ語 (Telugu) での学校名であり、それを英訳すると「Beautiful Forest (=美しい森)」と表現できる。

まるのではなく、①～⑤段階に属する子どもたちが各テーブルへ均等に配分される。したがって、異なる段階の子どもたちが同じテーブルで学習を共有する。各テーブルでは、子どもたちがそれぞれの能力に合った内容を各自のペースで取り組んでおり、もし分からないことがあれば教師に質問するか、もしくは同じテーブルを共有している友達同士で助け合う。

算数の授業を観察した際、ある男の子が計算問題に頭を抱えている様子だった。そのとき、教師は違うテーブルで①の段階に属する子に付き添っていたため、その男の子の様子に気づくことができずにいた。しかし、同じテーブルを共有していた子が、その男の子の様子に気づき、解き方を身振り手振り丁寧に教え始めた。その後、頭を抱えていた男の子は解き方を理解したのか、しばし1人で問題を解き、元気よく教師の元へ解答をみせに行った。著者も気になり、傍へ近寄ってみると、男の子の解答は正解していた。教師は他の子への対応中であり忙しそうではあったが、知らぬ間にその男の子が問題の解き方を理解していたことで、驚きを隠せない様子であった。しかし男の子が正しい解答をすることができたことで、教師はまるで自分のことのように喜び、男の子も満面の笑みでとても嬉しそうであった。これは一例にすぎないが、農村学校における教育的取り組みは、子どもたち個々の学習能力を向上させるためだけではなく、他者と「分かち合い」をすることを通して、人間関係の「つながり」を大切にする学びが育まれているのである。

むすびにかえて

多種多様な取り組みが内包されている「持続可能な開発のための教育（ESD）」の概念には、物質的なものではなく非物質的なものが核となっており、制度面での整備のみで達成されるものではないであろう。むしろ、それらの機会を通して習得したものを個々が内面化し、日常に生かすことで初めてESDとしての取り組みが始まると筆者は考える。

本稿で取り上げた「リシヴァリー・エデュケーションセンター」の「リシヴァリー・スクール」と「農村学校」においては、他者との「対話」や「ふれあい」に教育的意義を見出すことで、子どもたちに人と人との「つながり」を意識させる教育実践が行われていた。そして、一時は産業化の影響から環境破壊が進んだ土地を植林などの環境保全活動により、現在ではキャンパス内に広がる豊かな自然環境からの恵みを受けることで、リシヴァリー・エデュケーションセンターの子どもたちやスタッフは自然との「つながり」をも感じながら生活をしていた。

今回取り上げた「リシヴァリー・エデュケーションセンター」の事例のように、学習の機会の提供から、個々が内面化し、日常の生活に実践していくこと。このような実践こそ、「持続可能な開発のための教育（ESD）」にむけて、今私たちに求められていることなのではないだろうか。

【参考文献】

Krishnamurti, J. (1964). *This Matter of Culture*. Rajagopal, D. (ed.). Chennai: The Indcome Press.

Krishnamurti Foundation India. *Information Brochure*. Retrieved Nov 30, 2006, from
<http://www.rishivalley.org/news/Information-brochure-9-08-04%20final.pdf>

神尾学・今井重孝・岩間浩・金田卓也（2005）『未来を開く教育者たち』コスモス・ライブラリー。

J.クリシュナムルティ（1991）『学びと英知の始まり』（大野純一訳）春秋社。（Krishnamurti, Jiddu（1975）. *The Beginnings of Learning*. Harper & Row.）

———（1997）『クリシュナムルティの世界』（大野純一編訳）コスモス・ライブラリー。

武井敦史（2003）『クリシュナムルティ・スクールの民族誌的研究』多賀出版。

日本ホリスティック教育協会編著（2006）『持続可能な教育社会をつくる：環境・開発・スピリチュアリティ』（ホリスティック教育ライブラリー6）せせらぎ出版。

【URLs】

クリシュナムルティ財団（インド）：<http://www.kfionline.org/index.asp>（英語）

リシヴァリー・スクール：<http://www.rishivalley.org/>（英語）